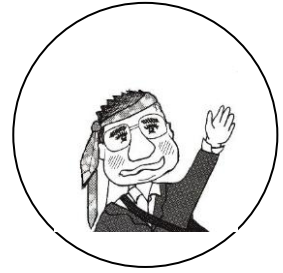


# 大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL：06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail：daimao@travelmitra.jp)

## シャクティ魂とコンテンポラリー・ダンス (2)

シャクティは述べている。

「私の創作の踊りは完全ヌードで踊ることが多い。肉体っていうのは太陽の下で大らかに出すもの、はずかしくかくすものではない」

前述したように、シャクティは土方巽の影響をうけた。それだけだろうか。タントリズム(密教)の影響があるのではないだろうか。もしそうなら、そのルーツはどこからきたのか。

シャクティの正式名は、ビーナ・シャクティ・チャクラワルティという。チャクラワルティは、ベンガル州のバラモン名である。シャクティの父チャクラワルティとは、どのような人物なのか、あまり知られていないようである。さっそく、某名誉教授に問い合わせた。彼の学生時代に、京都外大に英語のインド人教授がいたことを記憶していた。その前に、仏教大学に在籍していた。その頃大学前に実家があるヴァサントマラと知り合い結婚することになった。その実家が現在のヴァサントマラ印度舞踊研究所である。

タントリズムといえばベンガル州で盛んだといわれているので、父の影響を受けたのか、と思ったが、今のところ何の確証もない。

ダヤ・トミコは内弟子として研究所に住み込んでいた。歌舞伎、落語の世界では内弟子制度がある。外弟子は外から師匠のもとに通うお弟子さんのことである。内弟子は師匠の自宅に住み込んで、家事雑用などをこなしながら芸を磨くことである。日本のインド舞踊関係で内弟子になったということを知ったことがない。珍しい事例である。これは、「山陰もの」の為せる業ではないか、とわが輩は秘かに思っている。外弟子は、一歩研究所からでると自由である。師匠と住んでいると、何かと気をつかうのが内弟子である。トイレだって、お風呂だってわれ先に使えない。この窮屈さに耐えなければならない。「山陰もの」は但馬杜氏の伝統にみるように、耐えることを知っている。それで演技力が強く磨かれる。

インドではグル(師匠)の家に住み込んで舞踊を学ぶことは珍しいことではない。オディッシー舞踊家野中ミキは、最初デリーの舞踊学校で師匠ラマーニー・ランジャン・ジェナーからオディッシー習った。彼は農家の息子として生を受けたが、最初のオディッシー男性教師となった。彼はレームナー村の生家近くの教室で、弟子たちを教育するのを信条としていた。それで、野中はそこに住込み指導を受けたが、僻村の農家での生活は、それなりに苦労したであろう。エアコンもない部屋と(日本人にとって)粗食では、インドの生活は厳しい。ちなみに、野中もヴァサントマラ印度舞踊研究所の出身である。

この内弟子制度は、古代のヴェーダ時代からあった。ヴェーダはバラモン教聖典の総称で、「知る」という意味である。ヴェーダはバラモン祭司によって代々口承で伝えられてきた。哲学者シャンカラの総本山シュリンゲーリ（南インド）にバラモン子弟の専門学校がある。できの悪い子が、教室の外で立たされているのを見た。

また、わが輩の知るアシュラムにも「ヴェーダパータサーラ」という学校がある。サーラは真髓、パータは暗唱の意味である。これらの学校には、幼稚園児から中学生位までの子どもたちが寄宿舎生活をしてながら、暗唱に励んでいる。この子らの暗記能力はすごいものがある。

学校らしきものがない時代は、グル（師匠）の庵にバラモン青年が住み込んで学ぶことになる。バラモン祭司は家庭をもっている。グルの妻がイケメン青年によこしまな感情を抱き誘惑したが拒まれた。嫉妬に狂った妻は、誘惑されたとグルに訴えた。グルは怒って弟子を追放してしまった、という説話がある。いつの時代にもありそうな話だ。

「グルの妻、自分の娘と交わる者は、グルの寢床を犯す者に[等しい]。彼の男根を切り取り、殺すべし」  
(ヤージュニャヴァルキヤ法典、平凡社)

もしかしたら、イケメン青年は冤罪で殺されていたかもしれない。逆の場合も同様で、女性が同じ過ちを犯した場合も断罪されるとの説である。「不倫は文化だ」と軽口をたたけるのは日本芸能界の話で、バラモン文化では、特にバラモンに対する不義は死罪に相当する。もっとも、バラモンが下位カーストに犯す罪は軽い。なんとも不合理な規律だ。

ながながと横道にそれているが、これは意図的にそれている。紙面が埋まらないからである。

オーストラリアにいるシャクティと連絡がとれ、ヴァサンタマラの外弟子の連絡先を教えてもらった。どうやら、この外弟子Iが高齢のヴァサンタマラのお世話人のようである。ところが、いくら電話しても留守電になってしまう。それで、知己の古弟子Sに電話して、外弟子Iに連絡を取ってもらおうと思い、通話を試みたが電話機の故障なのか、すぐにプツンと切れてしまう。

わが輩としては、ヴァサンタマラの生の声、生の記憶から調査を始めたいのである。それに、物的資料、論文とか写真とかで補強したいと思っている。それには京都外大、仏教大学の図書館にいて紀要・雑誌等が残っていないか現地調査する必要がある。

ところが、わが輩は6月21日(日)国際ヨガDAY京都の日まで身動きとれない状況にある。その上に、総領事館の文化活動の一端を担い、18日には奈良県香芝市に調査交渉に出かけなければならない。八尾市のインド映画上映の件もある。

さらに、この「お笑いエッセイ」の原稿のほかに、二本の執筆(『Who am I?』、『昭和という故郷』10月出版予定)が続行中である。

さらに、さらに、只今原稿(『菩提行入門』)を受け取った。校閲のためだが、専門書であるため、わが輩の能力外である。これは7月以降に検討したい。

そんなパニック脳に追い打ちをかけるように、「ネパール人のベビー・シッターを紹介してほしい」と電話があった。全くわが輩の範囲外なので、即断った。

実はわが輩の旧友が5月13日に旅立った。1977年に中央インドで出会った。5月に新潟にお見舞いにいったのが最後となった。人さまのために生きてきた尊い人である。わが輩の二倍生きた。わが輩はまだ現世にいる。まだまだ歩まなければ、彼の人に到達することは叶わない。